

## 連載エッセイ 音楽学者のつれづれ

### 第2回 「追分」と「お水取り」

永原恵三

前回の「フィールドワークのはじまり」で「はじまりのはじまり」として記した追分への日帰り道中に向かうきっかけとなったのが、柴田南雄による合唱作品《追分節考》(no.41)でした。ともかく、現場に行ってみたい、それだけでした。「追分」って何?、「追分節考」って「檜山節考」と似た話?とか、関西文化に育った私にとっては、実に不遜ながら、異文化の出来事だったと思います。

軽井沢や碓氷峠、信濃追分という地名と場所については、地図や鉄道情報などでの知識だけで、具体的な土地勘はまったくありません。現在は東京に住み関東の地名に馴染んできましたが、関西にいて「追分」という地名はあまり思いつきません。当時、1990年の時には、まだ日本民謡に関心がなく、「追分節」自体もよく分かっていなかったのが、思い出されます。

実際、追分節の流れとしては、《追分節考》で歌われる、碓氷峠近辺で歌われていた様々な「追分節」を端緒として、北国街道から日本海沿岸を経て北海道の「江差追分」へとつながっていきます。後のフィールドワークで訪れる北海道江差町については、当時はまだ何も考えていなかったのですが、1996年以降の実践に結びついていたようです。

さて、信濃追分に実際訪れて、今もはっきりと身体の中に刻み込まれていることがあります。それは「追分」が場所の具体的な形態を表わす言葉であり、まさに道が分かれる場所である、ということでした。ここでは、中山道と北国街道との分岐点に位置するのが「追分」であることを、その場所に立って始めて認識しました。それとともに、ここには宿場が集まり宿場町が形成されたことも、身体で理解できたと思います。宿場町には旅籠があり、そこで働く女性たちがいて「飯盛女」と呼ばれていたことも、地元の出版社による研究書で分かりました。

《追分節考》に用いられている追分節の旋律群のなかで、一つの旋律だけあえて全体の音組織から半音ずれて歌われるのが、お座敷唄となった「信濃追分」です。また旋律の様式も、これ以外はすべて追分節の特徴であるメリスマ的旋律であるのに対して、この旋律はメリスマの特徴は保ちつつも拍節的になっています。お座敷唄

が三味線の伴奏で歌われるものであって、馬を引きながら歌うとされる馬子唄と完全に線引きがなされているのが分かります。

さて、「追分」が東の文化だとすると、西の文化で、柴田南雄がシアター・ピースとして作曲しているのは、《修二會讃》(no.57)です。これは毎年2月下旬から3月初旬にかけて、東大寺二月堂で執り行なわれる「修二會」(正式には十一面悔過)の声明を取り入れた作品です。この行事は奈良時代から一度も途絶えたことがなく、感染症の危機にあった本年も万全の対策を講じて執り行なったとのこと。本来、「修二會」の行事の一部が「お水取り」ですが、関西の人びとは親しみを込めて、全体を「お水取り」と言っているところがあります。

「修二會」(お水取り)が催される東大寺二月堂を、私は普段から何度も訪れていました。関西では京都、大阪、神戸、奈良という各都市間の鉄道によるネットワークは非常に発達していて、奈良は大阪から近鉄電車で約30分という気軽さがありました。日常的に「今日は奈良に行ってみたいなあ」と思って少し時間があれば、いつでも行けました。関西に住んでいると、「お水取りが終わると春が来る」という言い伝えがあるぐらいに生活に密着したもので、その映像は必ずテレビで流れました。「お水取り」は見に行くものではなく、いつも年中行事として、寒牡丹が咲くように、季節を感じるものだと思います。

東京で、お茶の水女子大学に着任してから、「修二會」を見に行ってきたというお話をたびたび伺うようになりました。ちょうど「修二會」の時期は様々な入試と重なるので、私自身は一度もその機会を得ることができませんでした。それでも、関西にいた時に、二月堂には観光ではなく、自分の意思で行きたいと思って何度も足を運びましたので、お堂や舞台を実際に身のまわりにある場所、お寺という非日常空間でありながら、自分にとっては日常空間に近い場所、と認識しているように思います。声明やテレビの映像も自分の体験と同化していたのでしょう。

「お水取り」の前は2月の一番寒さの厳しい頃で、奈良でも1年に数回しか積もらない雪が、お堂にうっすらと積もります。でも、練行衆の方々が降りてこられる頃には、春の兆しが輝いているのです。

今年も師走を迎え、新たな年に「お水取り」も再びやってきます。

(第2回終わり)